

障害児に対する早期乳幼児期からの 包括的医療が Quality of Life に 及ぼす影響とその効果的システム確率の研究

—新生児・乳児の心理的ケア—

(分担研究：新生児・乳児の退院後の在宅ケアシステムに関する研究)

研究協力者 藤田 和弘¹⁾ 田角 勝²⁾
山田美智子³⁾ 鈴木 康之⁴⁾

要約：NICU卒業児で、障害のある子供達の母親を対象に、障害の受容課程での問題を検討した。受容できると答えた母親は65.3%で、そこに至るまで平均20カ月を要している。施設入所や在宅の違い、障害の種類や程度などより、早期にあやし方を指導された家族の方が有意に受容が進んでいた。早期からの具体的な丁寧な接触指導が重要と考えられた。

障害を持つ母親の多くは、継続的な入所施設ではなく、毎日通える通園施設や一時入所施設を望んでいた。今日的な療育体制の整備が望まれていると考えられる。

研究方法：NICU卒業児で、障害のある子供達の母親を対象に在宅ケアの受容とニーズを調査した。昭和大学、神奈川こども医療センター、東京小児療育病院で経過観察中の障害児148名の母親からアンケート調査を行った。内容は早期接触と指導の有無とあり方、障害受容の課程、要望などである。

結果：1. 保育器滞在は平均63.1日で、この間に児と接触したのは82名(55.4%)で、平均14.2日であった。あやして喜んだと受けとめた

母親は19.6%であった。

2. 保育器中の関わりを医師か看護婦が勧めたのが32.4%、具体的な指導を受けられたのは31.7%であった。(母親の記載から)

3. 障害の受容ができたと答えた母親は65.3%で、それに至るまでは平均20.0カ月を要した。立ち直れていない母親は6.8%、まだわからないと答えた母親は20.9%であった。

4. 心理的立ち直りを20点満点で表すと、重症心身障害が15.2、発達遅滞が15.9、肢体不自由

1) 筑波大学心身障害学系：Institut, of Special Education, Tukuaba University.
2) 昭和大学小児科：Dept. of Pediatrics, Showa University.
3) 神奈川こども医療センター：Kanagawa Children's Medical Center.
4) 東京小児療育病院：Tokyo Children's Rehabilitation Hospital.

が16.4、その他が15.4と差がなかった。また、在宅群と入所群でも差はなかった。

5. 母親の心理的回復には、子供の年齢や保育器滞在日数に関係なく、あやし方の指導を受けたかどうかが大きく、心理的回復得点で18.2と15.3の違いがみられた。

6. 立ち直りに支えとなったのは、医師と同じ境遇の親たちが多く、看護婦やケースワーカーは比較的少なかった。

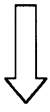
7. 母親達の要望としては、通所施設、医療費援助、送迎補助などの要望が多くみられた。

考 察：母子間のアタッチメントを形成するには、できる限り早期に母親が子供に対してあやす機会を与えることが不可欠であり、それにより母親の児に対する心理的受容が促進され、後で障害が残った場合でも、母親の心理的立ち直りが早くできると考えられる。保育器滞在中に児をあやした母親は約半分、はじめてあやした日も1～200日と幅があり、あやした頻度も平均

1.4回/日と少ない。改善する努力が求められよう。医師や看護婦が早期にあやし方を母親に教え、勧める必要がある。特にあやし方の指導の有無が母親の心理的立ち直りと有意に関係しているという今回の調査結果は興味深い。母親の気持ちをくみ取り、これを励まし、精神的支えとなり、児のあやし方を具体的に丁寧に指導することを重要な役割と位置づける必要がある。

そうした役割を担うのは医師や看護婦などであるが、同じ悩みを持つ親・家族・友人の存在が母親の支えとなるので、これらの者との交流を図っていくことも重要である。

母親のニーズとしては、継続入所よりも一時的な入所施設や毎日通える通所施設を望む傾向がみられた。このような在宅ケアシステムを具体化してゆくことが緊急の課題と考えられた。在宅の医療費援助や通院・通園の送迎は、その必要条件の一部といえよう。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約: NICU 卒業児で、障害のある子供達の母親を対象に、障害の受容課程での問題を検討した。受容できると答えた母親は 65.3%で、そこに至るまで平均 20 ヶ月を要している。施設入所や在宅の違い、障害の種類や程度などより、早期にあやし方を指導された家族の方が有意に受容が進んでいた。早期からの具体的で丁寧な接触指導が重要と考えられた。障害を持つ母親の多くは、継続的な入所施設ではなく、毎日通える通園施設や一時入所施設を望んでいた。今日的な療育体制の整備が望まれていると考えられる。